

TOPICS

やませ予測・冷害回避システム 開発研究をスタート

地域基盤研究部 連携研究第1チーム

菅野洋光

KANNO, Hiromitsu

《2003年冷害の教訓》

東北地方では、2003年は10年ぶりの冷害となりました。地球温暖化と異常気象の頻発が危惧されていますが、2003年冷害の場合は、ヨーロッパの異常高温、北米の高温・乾燥と同時に発生しました。このことから、仮に地球温暖化が進み地球全体で気温が上昇するにしても、地域的に異常高温や異常低温が生じるものと考えられます。従って、東北地方では、今後もさらに冷害・冷害の発生に注意する必要があります。

このため、やませによる夏の低温を早期に予測し、水稲などの冷害回避に役立てる研究「やませ気象下の水稲生育・被害予測モデルと冷害回避技術の開発」を、農水省の「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」の採択課題として、本年4月から3カ年の予定でスタートさせました。

《どこが新しいのか？》

これまで東北農研センターが運用してきた「水稲冷害早期警戒システム」では、リアルタイムでの気象観測データに基づいた警戒情報を流してきました。新システムでは、気象庁作成の気象予報数値データを用いて、1週間程度先までの気温分布予想マップ、作物生育予測マップを作成・発信し、深水灌漑等の早期実施による冷害防止に役立てます。この様な、気象予報データが水稲の安定生産に直結するシステム作りは世界で初と思われまます。

また、2003年冷害から得られた教訓を基に、穂いもち発生予測・総合防除システムの開発、水稲直播による冷害危険期の回避技術の開発、有機栽培の有効性の検証、そして冷害被害米の新用途開発を行います。これらの成果は、各種の媒体で情報提供するとともに、「やませ予測・冷害回避システム」としてインターネットを通じて情報を発信していきます。

東北農研センターとともに、青森県農林総合研究センター、岩手県農業研究センター、岩手県工業技術センター、宮城県古川農業試験場、福島県農業試験場、新岩手農業協同組合、(財)日本気象協会が共同研究に参加します。

